

インターネット上での匿名性と攻撃性の関連

— 仮想的有能感の調整効果に着目して —

○横田あさぎ・福留広大

(福山大学大学院人間科学研究科・福山大学人間文化学部)

インターネットにおける攻撃性には、インターネットの特徴である匿名性が大きく関わっていると考えられている。これまで多くの先行研究から匿名性は人を攻撃的にすることが明らかになってきた (e.g., 山口, 1980)。インターネットは誰でも不特定多数の人と匿名状態でやり取りできるツールである。インターネットは他者軽視が容易であり、仮想的有能感が高い人にとって自己の正当性や自己評価を維持したり自分が有能だという感覚を得られたりする場所であると考えられる。仮想的有能感とは、「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚」と定義される (速水, 2011)。インターネットにおける攻撃性と仮想的有能感の関連は明確に示されず、尺度の再検討の必要性が示唆された (青山・高橋, 2015)。そこで、不表出性攻撃に着目したインターネットにおける攻撃性尺度を作成した (横田・福留, 2021)。

本研究では、新しく作成したインターネットにおける攻撃性尺度を用いて仮想的有能感の関連、匿名性とインターネットにおける攻撃性との関連性について仮想的有能感が調整効果を持つかどうか検討する。

方法

調査対象 4年生大学の学生 59 名のうち 56 名

調査時期 2021 年 7 月 6 日～7 月 29 日

調査方法 Microsoft forms によるオンライン調査

質問紙構成

匿名群 (1) 仮想的有能感尺度 (速水・木野・高木, 2004) 11 項目 5 件法 (2) インターネットにおける攻撃性尺度 (横田・福留, 2021) 22 項目 5 件法

非匿名群 (1) 基本情報：氏名、性別、学籍番号、年齢、生年月日、住所 (2) (3) は匿名群の (1) (2) に同じ。

手続き 匿名群のリード文には、回答データは匿名情報として扱われ個人を特定することが出来ない旨の記述をした。非匿名群については、最終ページでデブリーフィングを行い、データ使用の

可否を求めた。また、本研究は福山大学研究安全倫理委員会の承認に基づき実施した (承認番号：2021-H-27 号)。

結果

匿名性とインターネットにおける攻撃性との関連に対する、仮想的有能感の調整効果を検討するために階層的重回帰分析を行った。インターネットにおける攻撃性を目的変数として、Step1 に匿名性と仮想的有能感を説明変数として投入し、Step2 に Step1 の説明変数とその交互作用項を投入した (Table 1)。

Table 1 インターネットにおける攻撃性を目的変数とした階層的重回帰分析

	β	R^2	ΔR^2
Step 1		.287 **	
匿名性	.040		
仮想的有能感	.548 **		
Step 2		.308 **	.021
匿名性	.029		
仮想的有能感	.489 **		
匿名性×仮想的有能感	-.155		

その結果、匿名性と仮想的有能感の交互作用は有意でなかった ($\beta = -.155, p = .214$)。また、仮想的有能感の主効果は有意であった ($\beta = .548, p < .01$) が匿名性主効果は認められなかった ($\beta = .04, p = .745$)。

考察

仮想的有能感の主効果は得られたものの、匿名性と仮想的有能感の交互作用が得られず、仮説は支持されなかった。しかし、仮想的有能感とインターネットにおける攻撃性の関連については明らかになった。

交互作用が示されなかった理由の一つとして、匿名性の操作が成立していなかった可能性がある。匿名と非匿名の群間差がより明確になる操作方法について、再検討が必要だろう。また、攻撃性を誘発する要因は匿名状態以外にも考えられるため、ほかの誘発要因についても検討が必要であろう。

主要引用文献

横田あさぎ・福留広大 (2021). インターネットにおける攻撃性尺度の作成と仮想的有能感との関連—表出性・不表出性に着目して— 日本心理学会第 85 回大会